

バイオトイレにIOT

ミカサ、レンタル遠隔管理

【大分】ミカサ（大分市、三笠大志社長、097・551・8826）は、IOT（モノのインターネット）を活用した遠隔監視型レンタルトイレ事業に乗り出した。微生物を利用する自社製バイオトイレ（写真）にセンサーを付け、使用回数や処理槽の状況を把握する。メンテナンス回数の削減などの効率的運用につなげる。

【大分】ミカサ（大分市、三笠大志社長、097・551・8826）は、IOT（モノのインターネット）を活用した遠隔監視型レンタルトイレ事業に乗り出した。微生物を利用する自社製バイオトイレ（写真）にセンサーを付け、使用回数や処理槽の状況を把握する。メンテナンス回数の削減などの効率的運用につなげる。

常が検知された場合は、借り主に通知する。使用頻度が多い場合は利用制限をアドバイスするほか、温度の異常に異物の混入などを予測して対処する。

同社のバイオトイレは山奥などの遠隔地に設置することもあり、トラブル発生時やメンテナンスに要する時間とコストが課題となっていた。



ミカサは山間地や建設現場でレンタル用のバイオトイレを常時1

00個ほど貸し出しているほか、累計で約100個の販売実績がある。1日に40回利用できる洋式タイプのレンタル料金は1カ月で3万7000円。

三笠社長は「将来は微生物が入った槽の管理などの遠隔操作も実現したい」としている。

福岡県内のマンションギャラリーに設置し